

（目的）被服製作教育において、縫製技能の低下が指摘されて久しいが、衣生活の変化に伴って被服製作領域の削減と内容の軽減化がますます進行している。本研究は、今日の被服製作教育の意義について、手指の微細運動の能力向上の視点から検討した。第1報では児童・生徒の手指の微細運動能力を糸結び数で評価し、微細運動能力の実態を把握するとともに、性差および加齢変化について分析した。

（方法）調査は、都内、神奈川県、青森県の小学生5・6年・中学生・高校生の男女2751名を対象に1995年1～9月に実施した。調査は「糸結びテスト」と第2報で報告する質問紙調査を同時に行った。「糸結びテスト」は、1958年に藤沢ら⁽¹⁾が実施した手法を用い、長さ10cmの手縫い糸をこま結びでつなぎあわせ、5分間で完成された結び目数を計測した。

（結果と考察）糸結びの成績は加齢とともにほぼ増加する傾向が認められた。しかし、1958年との比較において、女子では40～50%、男子では40～60%の低下がみられた。また、個人差が広がり、特に学年が低いほど個人差が大きいことが示された。小学生では5分間に全く糸を結ぶことができない例もみられ、37年間の手指の巧緻性の低下が著しいことが明らかとなった。

手指の巧緻性の低下は、現在の利便な生活環境の中で、手指を使う機会が減少したことが一因と推測されるが、高校男子生徒を対象に手縫いの継続的な反復練習による「糸結びテスト」への効果をはかったところ、明らかに向上がみられ、被服製作教育は、手指の巧緻性を高める役割を担う可能性を有することが示唆された。

(1)藤沢キミエ、太田昌子；奈良女子大学家政学会，VOL.6,NO.2,14-19(1959)